

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：32687

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23730603

研究課題名（和文） 他者配慮を含めた児童の主張性と社会的情報処理モデルとの関連

研究課題名（英文） The relation between assertiveness and social information processing in children

研究代表者 江口 めぐみ (EGUCHI MEGUMI)

立正大学・心理学部・助教

研究者番号：40550570

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、他者配慮の観点を含めた児童の主張性について、社会的情報処理モデルとの関連を検討し、より詳細な生起過程を検討することであった。小学4 - 6年生の児童を対象に研究を行った。主張性は、“自己表明”と“他者配慮”の2側面から測定し、両側面の得点の高低により、4群を設定した。結果、主張性のタイプおよび性差によって、選択される主張行動や、主張行動の算出と反応時に選択される情報処理過程が異なることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

The relationship between assertiveness and social information processing was investigated. Elementary school children in grades four to six participated in the study. The children responded to a questionnaires inquiring about assertiveness that included two components of assessment: “self expression” and “consideration for others”. Then, the children were divided into 4 groups according to their scores on the two components of assertiveness. The results indicated that the relation between assertiveness, assertive behavior and social information processing depended on sex and the type of assertiveness.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 23 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：主張性，他者配慮，児童，社会的情報処理

1. 研究開始当初の背景

これまでの主張性研究では、国内外ともに自己表明に焦点が当てられていた。すなわち「表明できるか否か」の行動面からの研究である。主張性の高さは、心理社会的適応に寄与するとされており (Alberti & Emmons,

1990)、自己表明できることが、適応的な主張と同義に考えられてきた。

しかし、協調を重視する日本においては、「必要な自己表明は行うが、他者への影響や調和を考え、あえて主張しないことも選択する」といった、独自の主張スタイルが見出さ

れている。これらは一見「主張できない」消極的・不適応的な行動とも取れるが、配慮をベースにした、日本の価値観に合った1つの適応の形(高木, 2001)とされている。

こうした背景から、近年では「他者配慮があるかどうか」の視点を加え、主張性を再検討する研究が行われている(e.g., 柴橋, 2001; 用松・坂中, 2004; 渡部, 2006, 2009)。

他者配慮を含めた主張性研究であるが、対象は成人が多く、青年期、思春期と広がりが見られているが、児童期については、未だほとんど検討が行われていない。

また教育現場では、「自分も相手も大切にしたい自己表現」として注目を集め、児童のコミュニケーション能力向上を目指し、トレーニングが盛んに行われている(e.g., 園田・中釜, 2001)。

しかし、「他者配慮」は理念上重視されているものの、その特徴や測定法が不明瞭であるため、どうしても「自己表明」に焦点を当てたトレーニングに偏りがちである。

こうした中で申請者らは、以下の研究を行ってきた。

① 児童用他者配慮尺度の作成(江口・濱口, 2010): 学会誌に掲載された児童用尺度としては、本邦初であり児童期後期の、「他者配慮」の様相が明らかとなった。他者配慮は男子より女子で高く、先行研究と一致した。

② 主張性と、性格特性との関連(江口・濱口, 2010)

③ 主張性と、内的・外的適応の検討(江口・濱口, 2012)

: 主張性を4つのタイプに分け、性格特性、内的外的適応状況との関連を調べた。男女とも2側面が高い「両高」群が最も適応的であった。また男女で、他者配慮の意義が異なり「配慮優位」タイプは、女子では適応状態が良く、男子では不適応的な性格傾向が高く、教師から適応状態を低く評価された。

上述の研究において、他者配慮を含めることにより、主張性のタイプごとの状態像や適応状況、性差による特徴が詳細となった。また、他者配慮と自己表明とが高い＝(主張性が高い)＝適応状態が良いことが示された。

しかし、児童において他者配慮と自己表明が、主張場面でのどのように機能して適応状態に至るのか、その過程は詳細にされてこなかった。

2. 研究の目的

主張場面では、具体的な主張行動の他、認知過程、主張相手といった要因が存在する。しかし他者配慮を含めた主張性との関連はほとんど検討されていない。よって本研究では上記の要因と主張性のタイプとの関連を明らかにする詳細な検討を行った。その際、認知処理過程の検討にはDodgeの社会的情報

処理モデル(Crick & Dodge, 1994; Dodge, 1986)を利用した。

このモデルは、出来事を情報処理の対象と考え、情報処理ステップを経て、最終的な行動生起を説明するものである(Crick & Dodge, 1994)。実際場面では、瞬間的に働くプロセスであるが、細分化して検討することで、認知的特徴や偏りを明らかにし、行動変容を可能にする。主に攻撃行動への介入に用いられ、個人特性(攻撃性)を超えて行動に変容をもたらすことが報告されている。

ステップは6段階あるが、今回は多くの研究で利用される前半の目標設定と後半の反応選択を取り上げ、主張行動(反応実行)への影響を検討した。

またステップ全体に影響を与える要因として、受け手の評価を取り上げた。これは、相手が主張行動をどう受け取るかによって、その行動が適応的か否が左右されるとともに、個人がその後獲得するスキルや、データベースの情報を規定する(e.g., Deluty, 1981)からである。

本研究は、児童の主張性がなぜ適応に役立つのかについて、認知処理、行動、他者を関連付けて包括的に検討する点で特徴的である。現在学校現場では、「自分も相手も大切に」の理念に共感し、主張性教育が広く行われている。しかし行動面のアプローチが主で、自己(表明できるか)が主眼となりがちで、認知面との結びつきが強い他者配慮の側面を扱うことは難しい。しかし我が国の児童の主張行動は、配慮的な日本文化の要因抜きに考えることは出来ない。トレーニングの際も、こうした点を踏まえなければ、表面的な行動教育に終始することが懸念される。本研究は、認知的側面にも焦点を当てることで、表明行動のみに捕らわれない、日本の価値観に合った主張性のあり方や、認知的側面からの新しい介入方法を提言し得るという点で、主張性教育に役立つと考えられる。

3. 研究の方法

実施された研究は以下のとおりである。全ての研究において、調査方法は個別記入式の質問紙法で、集団一斉方式で行われた。対象は小学4-6年の男女児童であった。

【研究1 主張行動の記述収集および主張性との関連の検討】

児童の具体的な主張行動を把握するとともに、主張性との関連を検討した。

質問紙 ①自己表明尺度: 濱口(1994)の児童用主張性尺度(ASC)。18項目4件法: ②他者配慮尺度: 江口・濱口(2009)の「主張における他者配慮」尺度。16項目5件法。③主張場面での応答行動: 主張場面の分類(濱口, 1994b)を参照に、対人場面(葛藤場面

および肯定的場面)を設定した。内容は、a) 他者への肯定的感情の表明(例:友だちが先生に褒められて喜んでいいる)、b) 要求拒絶(例:本を貸してといわれたが、自分が先に読みたい)、c) 権利防衛(例:列に並んでいる際に、割り込みをされた)のエピソードを提示し、普段の自分が言うセリフを自由記述で回答させた。また無言の場合も、「何も言わない」と記入を求めた。さらにその際の表情も4種類(普通・怒り・困惑、笑顔)から選択を求めた。

【研究2 情報処理ステップと主張性との関連の検討】

主張行動の算出過程を把握するとともに、主張性のタイプによる特徴を検討した。

質問紙 ①自己表明尺度、②他者配慮尺度:研究1と同様。③社会的認知質問紙:濱口(1994)、久木山(2002, 2004)を参照に作成研究1をもとに「対人葛藤」の主張場面を設定し、普段の行動を想定させ、以下の情報処理ステップの評定を求めた

- 解釈:偶然帰属の1種類3項目、5件法
- 目標設定:友好・主張・回避の3種類、各3項目5件法
- 反応評価:主張行動(研究1の選択肢より独自作成)に対する目標達成度、各3項目5件法
- 反応実行:主張行動(選択肢)の実行度

【研究3 主張行動と受け手の評価との関連の検討】

主張行動が、相手にどう評価されるのか、その際受け手の主張性がどのように関連するかについて検討した。

質問紙 ①自己表明尺度、②他者配慮尺度:研究1, 2と同様。③主張行動評価質問紙:研究1, 2をもとに「対人葛藤」の主張場面(Aさん(友だち)を遊びに誘った時に断られた)について、Aさんの主張行動(研究1より4タイプを提示)に対して、a) 意図の解釈(友好目標、主張目標) b) 行動の評価を求めた。

4. 研究成果

群の設定:研究1および3において、主張性得点による群分けを行った。先行研究(江口・濱口, 2012)にならい、自己表明尺度と他者配慮尺度の平均値を基準に高低に分け、さらに組合せにより4群を設定した。なお他者配慮尺度得点は、有意な性差($p < .001$)がみられたため、男女別の平均値を使用した。設定された4類型は、両高群(表明高・配慮高)、配慮優位群(表明低・配慮高)、表明優位群(表明高・配慮低)、両低群(表明低・

配慮低)であった(図1)。



図1. 主張性の4類型

【研究1】主張行動の分類

各場面で得られた記述は、先行研究(濱口, 1994b; 尾関, 2006)を参考に分類された。さらに表情との組合せにより、それぞれの場面に特徴的な主張行動カテゴリーが設定され、a)では肯定的主張(褒める)・非主張(無言)の2種類、b)では否定的主張(読みたい気持ちを伝える(否定的表情)・肯定的主張(〃(肯定的表情))・許容(OK)・拒否(NO)の4種類、c)では否定的主張(相手の非を指摘する(否定的表情)・肯定的主張(〃(肯定的表情)・非主張の3種類となった。

主張行動と主張性の4類型との関連の検討 各場面について χ^2 乗検定を行った。なお男女で異なる結果が得られたため、男女別の分析結果を示す。

肯定的感情の表明(a)は男子で有意であり、残差分析の結果、「両低」群では非主張が多く肯定的主張が少なく、「両高」群では非主張が少なく肯定的主張が多かった。

要求拒絶(b)は男子で有意であり、残差分析の結果、「両低」群では拒否が多く、「他者配慮」群では許容が多く、「両高」群では拒否が少なく肯定的主張が多かった。なお両場面において女子では肯定的主張が多く見られた(順に88.7%, 82.2%)。

上記のような被侵害度が低い場面では、男子で群差が生じやすく、主張性の両側面が高い群は友好的かつ自分の意見を表明する行動を選択し、他者配慮のみ高い群は他者を優先する行動が多く、両側面が低い群は友好的と解釈されにくい主張行動を選択しがちであることが示された。

権利防衛(c)は女子で有意であり、残差分析の結果、「表明優位」群では否定的主張が多く「他者配慮」群では肯定的主張が多かった。また男子では全体的に否定的主張が多かった(73.3%)。

上記は比較的被侵害度が高い場面であり、そうした場面では表明優位の群では、男子に多く見られたような権利を主張しつつ否定

的感情を表出する行動を選択し、表明優位群では、主張は行うが否定的感情を表出しない方法を多く選択することが示された。

以上より、主張性の類型によって選択される主張行動に違いがあること、その際に主張場面の特徴や性差が影響を及ぼすことが明らかとなった。

【研究2】認知処理過程と主張性との関連の検討

情報処理ステップについて、先行研究（濱口，1994）を参照に因子分析を行った。その結果3因子が抽出された。因子負荷量の高さから、第1因子は主張行動および配慮行動を有効と解釈する「主張的行動の有効解釈」、第2因子は、出来事を偶然と解釈し、主張目標を選択しない「偶然帰属と否主張目標」、第3因子は攻撃的行動および非主張行動を有効と解釈する「否主張的行動の有効解釈」とした。

その後、自己表明と他者配慮が及ぼす影響について、男女別にパス解析を実施した（図2，3）。有意なパスを示した変数を図中に示した。破線は負のパス係数を示す。

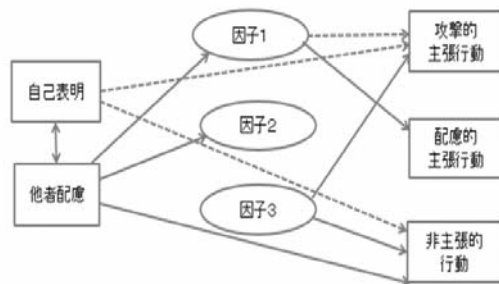


図2. 男子の結果

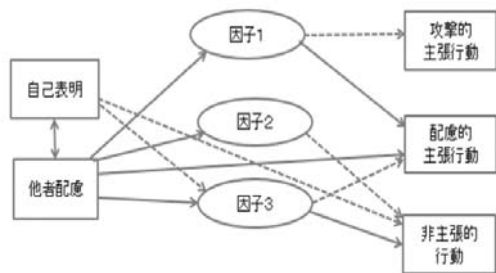


図3. 女子の結果

男子では自己表明において、主張的でない行動への直接の負のパスが見られ、他者配慮において、非主張的行動への直接の正のパスが見られた。また因子1を媒介し配慮的行動への正のパスと、攻撃的主張行動への負のパスが見られた。女子では自己表明において、主張的でない非主張的行動および因子3へ

の負のパスが見られ、他者配慮において、配慮的主張行動への直接の正のパスが見られた一方で、因子3を媒介し、配慮的行動への負のパスも見られた。また男子同様に因子1を媒介した配慮的行動への正のパスと、攻撃的主張行動への負のパスが見られた。上記のように、自己表明と他者配慮で、情報処理ステップへ及ぼす影響が異なること、男女で影響過程が異なることが示された。また、男女で共通する傾向として、他者配慮は配慮的主張行動を促進するとともに、非主張的行動を促進するような働きもあることが示唆された。

【研究3】主張行動と受け手の評価との関連の検討

主張行動が、相手にどう評価されるのか、その際受け手の主張性がどのように関連するかについて検討した。

分散分析の結果、男子では分析の結果、友好目標の伝わりやすさにおいて、行動の主効果が有意であり、多重比較（Tukey法）の結果、両低群は他の3群に比べて得点が低く、表明優位群と両高群は配慮優位群に比べて有意に得点が低かった（両低群<表明優位群=両高群<配慮優位群；すべて $p<.001$ ）。

また主張目標のつたわりやすさにおいて、行動の主効果が有意であり、多重比較（Tukey法）の結果、両低群と表明有意群は、配慮優位群と両高群に比べて有意に得点が低かった（両低群=表明優位群<配慮優位群=両高群；すべて $p<.001$ ）。

女子では、友好目標のつたわりやすさにおいて、行動×群の交互作用が有意であり、単純主効果検定の結果、行動では攻撃的主張行動において、配慮優位群に比べて表明優位群と両高群で有意に得点が高かった（順に $p<.05$, $p<.001$ ）。また非主張的行動において、両低群と表明優位群に比べて両高群で有意に得点が高かった（ともに $p<.01$ ）。

群では両低群において、攻撃的主張行動に比べ他の行動で得点が高く（すべて $p<.001$ ）、配慮優位群において攻撃的主張行動に比べて、配慮的主張行動と非主張的行動で得点が高く（順に $p<.05$, $p<.01$ ）、両高群において、攻撃的主張行動に比べて他の行動で得点が高く（すべて $p<.001$ ）、主張的行動に比べて配慮的主張行動で得点が高い傾向（ $p=.06$ ）がみられた。

また主張目標のつたわりやすさにおいては、行動の主効果が有意であり、非主張的行動に比べて主張的行動で得点が高かった（ $p<.05$ ）。

以上の結果から、男子では群の有意差は見られず、相手の主張行動の種類によって目標の伝わりやすさが左右されていることが

明らかとなった。友好目標の伝わりやすさは、攻撃的主張行動<主張的行動=非主張的行動<配慮的主張行動の順で高かった。この順序は、他者配慮の伝わりやすさと関連していることも考えられた。

主張目標の伝わりやすさは、非主張的行動=配慮的主張行動<攻撃的主張行動=主張的行動の順で高かった。相手からはっきりと不快感が表明されることで、より主張目標が伝わりやすいと言える。

女子の友好目標の伝わりやすさにおいて交互作用が見られ、男子とは違い、群によって行動に対する評価が異なることが明らかとなった。群では、攻撃的行動はいずれの群においても最も友好目標が達成されにくいことが示された。また女子では、自身の主張性タイプとは相反する(選択されにくい)行動に対し、「友好目標が伝わりにくい行動」と評価することが示された。主張目標の伝わりやすさは、男子と同様の結果であり、はっきりと表明することが、主張目標を伝得るうえで有効であることが示唆された。

総じて、女子の友好目標の伝わりやすさの解釈には、群によって差があったが、全体としては主張行動内容が、受け手の評価・反応へ影響を及ぼすことが示された。

研究1~3によって、児童の主張性と具体的主張行動、認知処理、他者の評価との関連が明らかとなったが、これらの知見を踏まえて新しい介入方法を検討し、主張性教育に活用することが今後の課題と言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 3 件)

Megumi EGUCHI and Yoshikazu HAMAGUCHI
Assertiveness and Interpersonal Stress in Japanese Children
16th European Conference on Personality
2012年07月10日~2012年07月14日
Trieste, Italy

江口めぐみ・濱口佳和
児童の主張性と主張行動内容との関連 (1)
日本心理学会第77回大会
2013年09月19日~2013年09月21日
札幌コンベンションセンター

江口めぐみ・濱口佳和
児童の主張性と主張行動内容との関連 (2)
—類型および性別の観点から—
日本カウンセリング学会第46回大会

2013年08月30日~2013年09月01日
東京電機大学埼玉鳩山キャンパス

[図書] (計1件)

園田雅代・鈴木教夫・豊田英昭・石川芳子・打波祐子・江口めぐみ・小島裕子・斉藤光男・高橋あつ子 合同出版 イラスト版子供のためのアサーション 2012年 14-15, 28-29, 46-47.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江口めぐみ (EGUCHI MEGUMI)

立正大学・助教

研究者番号: 40550570

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()